

論文審査の結果要旨

論文題名：注意変更修正と認知行動療法の併用介入法によって造血器腫瘍患者にある不安を軽減する効果：準ランダム化比較試験

Effects of reducing anxiety by a combinational intervention method using attention bias modification and cognitive behavioral therapy in patients with hematopoietic tumors: a quasi-randomized controlled trial

申請者氏名：小泉 浩平

審査の所見

<論文課題概要>

本論文は、造血器腫瘍患者を対象に不安心理を低減する介入法として、独自に考案した注意バイアス修正法(以下 ABM)と認知行動療法(以下 CBT)を組み合わせた治療プログラムの併用効果を、心理指標として日本語版 Profile of Mood State(POMS)を用いた気分プロフィール検査を、自律神経系の反応として心拍変動周波数解析を用いた生理的ストレス応答について、比較した臨床試験研究である。

<研究内容>

造血器腫瘍患者は不安を含む陰性の心理に長期間にわたりさらされ、不安障害とうつ病の発生率が高いことが知られていた。不安障害とうつは人間の活動性を低下させる一因子であり、がん患者の体力にも影響を与えることから、がん患者への心理介入はがん医療の課題の一つである。不安や抑うつのある者には、嫌悪な対象に注意を向けやすいという注意バイアスがあり、陰性情動の惹起を制御するには ABM が用いられてきた。一方、醸成された陰性情動には CBT が奏功するとして推奨され、ABM と CBT の双方が不安の異なる認知的側面を治療標的である。そこで本研究は、運動療法に ABM と CBT を組み合わせた介入が、造血器腫瘍患者の不安心理を軽減し、身体活動を改善するという仮説を検証した。研究の結果、ABM と CBT を組み合わせた介入が造血器腫瘍患者の不安心理の軽減を示し、交感神経活性が減衰することを明らかにした。

<科学的到達・新規性>

本研究の結果は、ABM と CBT の併用介入が造血器腫瘍患者にみられる不安心理を和らげる効果があることを示唆した。またその背景には交感神経機能の抑制による潜在的なメカニズムが寄与している可能性を論じた新規性が認め

られる。本研究の対象はがん患者のなかでも不安心理が強く出現することの知られている造血器腫瘍患者であったが、介入方法は既に手法が確立した ABM と CBT と安全に配慮した運動療法であったことから、本研究の対象患者と同様の心理状態にある他の腫瘍患者にも対象を拡張して利用するときに参加にできる研究手法でもあった。審査では、運動療法単独効果との比較、運動が心理に影響を与える可能性、運動強度に効果の違いに関する説明が根拠に基づいてなされ、科学的到達度は担保されていた。

<発展>

これらの知見は、高レベルのストレスを経験する造血器腫瘍患者の心理機制に収束をもたらす介入法として、運動療法に ABM と CBT の併用介入が有効である可能性を示唆するものである。今後の実臨床に関連する示唆を与え、がんリハビリテーション領域におけるさらなる発展性が見込まれる。

以上のことから、本論文は博士（健康科学）の学位授与に値するものとして認める。

【審査員】

主査： 田中 健一

副査： 金村 尚彦

副査： 曾根 稔雅